

しあわせ

10 月 号



うま うま うま うま
生れ生れ生れ生れて

くらの
生の始めに暗く

死に死に死に死んで

くらの
死の終りに冥し

(空海『秘蔵宝鑰』)

「手を合わす母」

新型コロナウイルスに翻弄される中、オリンピック、パ
ラリンピック、そして自民党総裁選と世の中はど
んどん動いている。

コロナもさるもの、次々と変異しながら、襲い
掛かってくる。終息宣言はまだまだ先のことか。
そんな中、今年も早や報恩講の季節を迎えた。

旧暦で十一月二十八日は親鸞聖人の御命日。親鸞
聖人は「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」と人
生で、報恩感謝の気持ちを持てる身となることほど大
切なことはないことをお示しくくださった。

人生は決して順風満帆ではない。老・病・死そして
出会いや別れ、様々な苦悩の連続の末、ついには死、
いかに大切なものとも必ず別れねばならない。その厳
しい現実の真ただ中で、「おかげさま、有難う」と
言える身になることこそ一大事だと。

法座案内

法味の会「ご和讃のこころ」

十月 十五日 午前十時
法話 住職

仏教婦人会追悼法要

十月 二十四日(日) 昼席
二十五日(月) 朝席・昼席
法話 武田一真
(龍仙寺住職)

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、
検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺
電話(〇八二二八)一四八二



お正月に祖母が誕生日を迎え、春になると次女と長男と父が、秋には長女と母と妻が、そして最後にわたしが、というように、わが家では年八回、誕生日を迎えます。そのたびにケーキを食べると体重計が気になりはじめますが、何といても命を授かった日ですから、やはり誕生日は大切にしたいですね。

ただし、かけがえのない命の誕生だからこそ、一番の問題も、じつはここにあります。それは、誕生日は誰でもおぼえているけれど、生まれてきたこと自体は、誰も身におぼえていない！ということですよ。これはじつに一大事はないでしょうか。今月紹介する弘法大師の言葉は、そのような、私たちが抱えている本当の問題を教えてください。

弘法大師 空海(774～835)は、日本が生んだ稀有の天才であり、日本仏教の歴史を通してみても、これほどの天才に匹敵するのは、おそらく法然聖人ぐらいいでしょう。

讃岐に生まれた大師は、十八才で都の大学

に入学されましたが、学ぶものなく、早々に中退して山岳修行に入られました。そして土佐の室戸岬で一つのさとりを得て、そのときから空海と名のられたようです。まったく無名の僧でしたが、三十一歳のとき、どういかわけか遣唐使船に乗られており、唐に着くと世界一難解とされるサンスクリット語をわずか数ヶ月で習得し、三朝の国師と仰がれた密教の第七祖、青竜寺の恵果阿闍梨を訪ねられました。阿闍梨は大いに喜び、

「あなたが来るのを待っていました」

と、即座に密教のすべてを伝授し、千人を超える門弟をさしおいて、日本からきた無名の僧、空海を密教の正統継承者とされました。

帰国してからの大師は、東寺の建立、高野山の開創、綜芸種智院という学校の創立、さらに満濃池の築造など、まさしく宗教・文芸・土木・教育にいたるまで八面六臂の活躍をさ

れ、六十二才で入定されました。まさに異次元の天才ぶりですが、その大師ですら、手のつけようのない問題がありました。

生れ生れ生れ生れて生の始めに暗く

死に死に死に死んで死の終りに冥し

大師の主著の冒頭にある言葉です。もとは漢文ですから「生生生生…死死死死…」とあって、その書をひらくものに異様なインパクトを与えますが、次のような意味でしょう。「生れ生れ生れ生れ、死に死に死に死んで…、いったいどれほどの生死を、わたしはくりかえしてきたのか。今なお、生も死もなにも見通せぬまま、わたしはここに生きている。」私たちは、生と死という言葉は知っていますが、だれもその言葉の意味を知りませんが、弘法大師であつてさえ、人間の眼では、生死の意味を見通すことはできないのです。人間が考える生死は亀毛(きもも) 兎角(とかく)のよう

なものだとも大師は仰っています。亀にはえている毛、兎のつゝ、それらは人の心がえがく虚構の象徴です。わたしが見つけている生と死は、兎の角のように、実体のない幻にすぎないと大師は言われるのですね。

先日、まだうす暗い早朝のことでした。

「みんなーせーのでおはようっぺいおう♪

せーの おっはよー♪ ……」

と、三才の次女ひとちゃんが、大きな声で、楽しそうに寝言をいっていました。思わず笑ってしまいました。生死については自分もまったく同じであつたなと思ひ合せました。

生も死も、わたしたちの考えている命のすがたは、まさしく幻のようなものなのでしょう。けれども夢のなかにある者は、けっしてそれを夢だとは思っていません。そのことを弘法大師は教えてくださいました。生も死も、わたしはなにも分かつてはいない。仏の智慧を仰ぐほかに道はないのだ、と。